

第3章 島田市の歴史文化

第1章及び第2章では、本市の概要と文化財について類型ごとの概要と特徴について述べました。ここでは、それらを踏まえて市の歴史文化について述べていきます。

1. 歴史文化の背景

I 大井川の影響

本市の中央を北から南へ流れる大井川は、旧石器時代から現在まで、この地域の人々の暮らしに大きな影響を与えてきました。大井川は人々に豊かな恵みをもたらす一方、両岸の人々の行き来を隔て、洪水などの災害をもたらす存在でもありました。その影響は政治、経済、社会、文化など多方面に及んでおり、大井川の影響を強く受けた歴史文化はこの地域の特性と言えます。

II 東海道の影響

古代から現代まで日本の東西を結ぶ東海道がこの地域に設定されたことで、人・モノ・情報がこの地に流入し、比較的早い段階で中央の影響を受けました。それに伴いこの地域では中央と連動した独自の歴史文化が展開しました。東海道を軸に形成された歴史文化は、この地域の特性の一つと言えます。

これら2つの影響が様々なかたちで本市特有の歴史文化を形成しています。

2. 歴史文化の特性

本市の歴史文化の特性として、上記の2点の背景を挙げましたが、ここではそれらの特性が影響を及ぼしたものとして、以下5つの歴史文化について見ていきます。

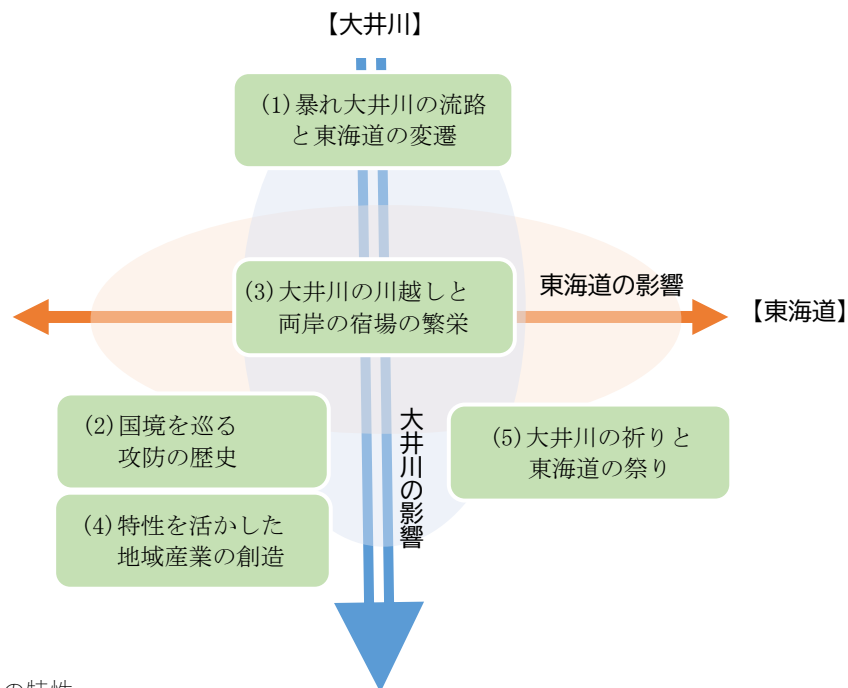


図 3-1 歴史文化の特性

(1) 暴れ大井川の流路と東海道の変遷

市内の中央を流れる大井川は、これまで何度も大きく流れを変えてきました。それとともに交差して東西に走る東海道も、その経路が変化しました。このことは現在に至るまで、人々の暮らしや交流に大きな影響をもたらしています。

日本屈指の高さを誇る南アルプスの山々を源流とする大井川は、山肌を削り大量の土砂を駿河湾へと押し流し、昔から暴れ川として知られました。中流域に当たる本市は流路が不安定で、大井川を横断する東海道もそのルートが移動し、人々の暮らしに影響を与えました。

東海道が設定された7世紀半ばは、まだ大井川の川幅が志太平野ほぼ全域に広がっていたため、大井川によって削られた山裾を通り川幅が狭くなる横岡一牛尾山間を渡るルート（伝路）と、牧之原台地の東南端の初倉駅から大井川の浅瀬や中洲を探しながら焼津の海岸沿いの自然堤防上の小川駅へと至る直線的な最短ルート（駅路）が定められ、旅人はいずれかのルートを通して大井川を渡りました。これらのルートの周辺には古墳や古代集落の遺跡が点在しており、人々が集住していたことがうかがえます。

寒冷期に入り大井川の水位が低下した中世の時代は、かつての伝路のルートは継承されたものの、平安時代に駅制が廃止されたため、大井川右岸の渡渉地点は北西に移動し、人々は浅瀬や中洲をつたって対岸に渡っていました。

豊臣秀吉が全国平定を果たした天正18（1590）年に転機が訪れました。当時駿河の領主であった中村一氏が古代から大井川の渡渉地点であった牛尾山の開削を行って人工的に流路を変えました（天正の瀬替え）。これにより大井川の蛇行がおさまって川幅が狭まり、兩岸に広大な平野を形成しました。その後、江戸時代には大井川のかつての氾濫原は新田開発が行われるとともに、東海道が直線的なルートに付け替えられたため島田宿も南へ移転し、近世東海道が成立しました。

交通量が飛躍的に増大した現代は鉄道や高速道路、主要幹線道路がかつての東海道に重なるように建設されています。



写真 3-1 牛尾（駿河）山と大井川

(2) 国境を巡る攻防の歴史

両岸を隔てる大井川と東西を結ぶ東海道が交わるこの地域は、駿河と遠江の国境にあって、しばしば戦乱の舞台ともなりました。市内に残る城跡には、国境を巡る攻防の歴史が刻まれています。

かつての駿河、遠江の国境に位置する本市は、中世において大井川を挟んで多くの戦いが行われました。特に人・モノ・情報が行き交う東海道が大井川を渡る戦略上の要衝でした。

建武2（1335）年に起こった中先代の乱^{なかせんだい}では、鎌倉幕府の再興を目指した北条時行軍と足利尊氏軍が大井川右岸の東海道の峠である小夜の中山で激突しました。

さらに戦国時代には武田勝頼が、東に大井川を見下ろし西の小夜の中山を望む牧之原台地に諏訪原城を築き遠江進出の兵站基地^{へいたん}としました。しかし、天正3（1575）年に徳川家康に攻められて落城しました。

このほか市内には、北朝方の今川範氏が、南朝方の立て籠もった佐竹兵庫入道^{さたけひょうごにゆうどう}を攻略した野田（大津）城、安倍川支流の藁科川上流部と大井川支流の笹間川上流部を隔てる交通の要衝を抑えた石上城^{いしがみじょう}、勝間田氏の支城とも言われて、遠江に進出した武田氏によって改修された湯日城^{ゆいじょう}などの城跡が残っています。これらは中世の大井川と東海道が交わる国境周辺の激しい攻防戦の歴史を物語っています。



写真 3-2 小夜の中山



写真 3-3 諏訪原城跡 三日月堀

(3) 大井川の川越しと兩岸の宿場の繁栄

水量が多く流れの速い大井川は、東海道の難所とされ、大雨が降ると対岸へ渡ることができず逗留を余儀なくされました。江戸時代を通じて行われた川越し制度に伴う旅客業は兩岸の宿場に繁栄をもたらしました。

江戸時代、三代将軍徳川家光は、寛永3（1626）年の上洛の際、この地を治めていた弟のただなが忠長が気を利かせて大井川に浮橋を架けてたやすく渡れるようにしたことに對し、「箱根・大井川は関東鎮護の要衝。その大井川に架橋することは神祖家康の意に反する」と言って機嫌を損ねたとされています。これ以後、明治維新後まで大井川での架橋・渡船は認められず、川越し人足と呼ばれる人々が旅人を担いで対岸へ渡しました。江戸時代に東海道の交通量が増大すると、旅人が人足に支払う渡し賃はかなりの金額に上り、島田宿・金谷宿の主要な財源となりました。

大雨などで大井川が増水し規定の水深を越えると、かわどめ川留と言って、すべての渡渉は行われなくなりました。このため旅人は島田宿・金谷宿の本陣や旅籠での宿泊を余儀なくされました。東海道の旅においては、通常、飲食・宿泊を行わない宿場で路銀を払うことはありませんでしたが、島田・金谷においては、天候にかかわらず必ず川越し賃の支払いがあり、川留で連泊すれば宿賃も増え、宿場の賑わいを生み出しました。天保14（1843）年の「東海道宿村大概帳」によると、島田宿の人口は6,727人（53宿中7番目）、金谷宿の人口は4,271人（53宿中16番目）で、両宿場の繁栄の様子がうかがえます。

3年に1度の大井神社の島田大祭で行われる、大奴が両脇の木刀に垂らす豪華な博多帯や西陣織は宿場に嫁いだ花嫁の出産を祈願したのですが、宿場の経済的な豊かさと東海道によって伝わった「下りもの」文化を象徴しています。

さらに、大井川の川留めは多くの旅人を両宿場に逗留させたため、地元の人々との交流が生まれ、松尾芭蕉をはじめとする文人墨客が多くの作品を残しています。



写真 3-4 歌川広重「東海道川尽大井川の図」

表 3-1 東海道五十三次宿場人口ランキング

人口順	宿場	人口合計	人口順	宿場	人口合計
1	大津	14,892	11	神奈川	5,793
2	府中	14,071	12	小田原	5,404
3	熱田	10,342	13	沼津	5,346
4	桑名	8,848	14	吉田	5,277
5	四日市	7,114	15	藤枝	4,425
6	品川	6,890	16	金谷	4,271
7	嶋田	6,727	17	藤沢	4,089
8	江尻	6,498	18	三嶋	4,048
9	岡崎	6,494	19	見付	3,935
10	浜松	5,964	20	鳴海	3,643

(4) 特性を活かした地域産業の創造

本市は、北から南に大井川が流れ、東西に東海道が通るといふ地の利を活かし、独自の地域産業が発展してきました。窯業、茶業、木材・製紙業、観光業など、時代の荒波を乗り越えながら成長を遂げた産業が存在します。これらは先人たちの知恵と努力によって支えられ、発展してきたものです。

窯業 平安時代前半の9世紀半ばになると、大井川左岸の伊太丘陵では^{うわぐすり}釉を施した^{かいゆう}灰釉陶器が大量に生産されるようになりました。11世紀後半にはこれらを焼いた陶工の一部が、対岸の横岡丘陵に窯を築いて陶器生産を行いました。戦乱による陶工集団の移動で陶器生産は何度か途絶えますが、戦国時代の16世紀後半には再び瀬戸の陶工が横岡丘陵に窯を築き、飴色に発色する^{てつゆう}鉄釉を用いた志戸呂焼を生産しました。これら大井川両岸で行われた窯業生産はいずれも古代から続く東海道の近接地で行われており、街道を行き交う旅人への販売や東海道を利用した陸上輸送、大井川の舟運と海上輸送で販路を広げました。

茶業 平地の少ない大井川上流では、斜面地でも栽培が可能な換金作物の茶が、すでに安土桃山時代に作られ、主食の米の購入や年貢金の支払いに用いられていました。江戸時代前半の17世紀後半には茶どころとして広く知られ、江戸にも出荷していました。

19世紀前半、大井川支流の伊久美川上流に住む坂本藤吉は蒸し製煎茶が江戸で人気を博していることを知ると、近江から茶師を招いてその製法の導入を図り、付加価値の高いお茶の生産に努めるとともに、周囲の茶農家にも勧め、のちの静岡茶の発展に貢献しました。幕末になると伊久美の茶農家たちは江戸に直営店を出す一方、海外貿易が始まって間もない横浜の外国人茶商へも積極的に売り込み、茶の海外輸出の先駆けとして活躍しました。

明治維新の後、川越制度が廃止され失業した川越人足や江戸から静岡に移住した旧幕臣の一部の人々は、生糸と並び海外輸出が好調であったお茶の栽培に取り組むため、荒地であった牧之原台地に入植しました。その後、この地域が国内屈指の茶産地になる礎を築き、現在は市を代表する産業となりました。

木材・製紙業 江戸時代には^{きりだし}伐り出しが厳しく制限された大井川上流の幕府御用林は明治維新後、民間に払い下げられ、下流の島田に木材産業が興りました。広大な山林を購入した大倉喜八郎は、今後紙の需要が高まると予測し、森林資源と大井川の水資源を利用した水力発電を組み合わせた製紙業を島田に興し、鉄道を使って製品を全国に出荷しました。

観光業 明治時代の終わりから、電力を使用する工場の建設や電灯の普及に伴い、大井川上流の水資源を利用する水力発電所の建設が計画されました。大量の建設資材を大井川上流へ輸送するための鉄道も建設されました。しかし、1970年代になると、自然環境と水資源の保全、水力から原子力への電源移行などから水力発電所の建設は減少し、輸送手段はトラックへと変化しました。貨物輸送のために建設された大井川鐵道は旅客輸送に転換しました。当時、全国から姿を消した蒸気機関車がけん引する客車に乗って大井川渓谷の自然と温泉を楽しむ観光列車の旅が人々に受け入れられ、観光業が発展しました。

(5) 大井川の祈りと東海道の祭り

恵みとともに水難をもたらす大井川は、この地域の人々に感謝と畏怖の念を抱かせました。また、様々な人々が行き交う東海道はお伊勢参りや秋葉山参詣の道でもありました。人々の祈りと祭りは、今もこの地域の人々に受け継がれています。

大井川と東海道の影響はこの地域の信仰にも表れています。志太平野を中心に大井川流域には大井川の水の神を祀る「大井神社」が74社あります。かつて大井川の氾濫原であった志太平野の神社の多くは大井川の上流方向に向かって参拝するように社殿が建っています。

また、一般の人々の屋敷の敷地も大井川の上流方向にあたる部分を船の舳先のようにとがらせ、洪水の際には水流を逃がして被害を減らす屋敷の造りが見られます。先端部分には塚を築いて先祖の墓や地の神様を祀っており、舟形屋敷あるいは三角屋敷と呼ばれています。慶長年間に大井川の氾濫により島田の宿場も流される被害を受けたため、大井川の上流方向に当たる西端に大井神社を設置し、周囲に土手を築いて洪水に備えました。

旅人が行き交う東海道は、この地域に様々な文物をもたらし発展に寄与しました。前述の島田大祭の大名行列以外にも、屋台で行われる上踊り^{うわおど}は、川留で路銀を使い果たした江戸の長唄の師匠が、旅籠の主人に恩返しをするために島田大祭で子供が踊るのに合わせて長唄を唄ったのが始まりとされています。現在も東京から笛や太鼓、三味線の奏者とともに長唄の師匠を招いて祭りを盛り上げています。

このほか東海道は、お伊勢参りや秋葉山（浜松市）参詣の旅人が行き交う信仰の道でもありました。沿道には秋葉神社の小さな祠^{ひよせ}が建てられ火伏の神を祀っています。沿道に暮らす人々にとっても住宅が密集する街道沿いは火災の被害も多かったため、この祠に火除けを祈りました。



写真 3-5 大井神社



写真 3-6 秋葉神社の祠